

誕生日に母を語る



誕生日は年に一度自分を産んでくれた「お母さん」を思う日…。

たくさんさんの思い出がよみがえります

伊東仁美(36歳/佐賀市)

母とは一緒に過ごした時間も長く、たくさんさんの思い出があります。

小学生のとき、片づけをしない私の文房具やランドセルを窓から全部投げ捨てたこと。真っ暗な中で、エンピツや消しゴムを探すのは大変でした。おかげで、もう2度と捨てられてはたまらない!と片づけができるようになりました。

高校生のとき、神経性胃炎になって夜中によく病院へ連れて行ってもらいましたね。あの頃は神経質な性格だった私に「無理せんでよかよ」とやさしく言ってくれました。今では、強靱な神経と胃袋になつています。

大学生のとき、「大学院に行きたい」という私に、「大丈夫よ」と言って、父を説得してくれましたね。本当は妹への仕送りもあり、経済的にもきつかったはずなのに、4姉妹の長女で、薬剤師になりたかった夢を諦めた母は、「あなたには諦めてほしくない」と言ってくれました。

院生時代に得たのは知識だけではなく、たくさんさんのものがあります。なりたいものにはなれなかったけれど、私にはかけがえのない時間でした。大人になつてからは、一緒にお風呂に入るのが日課。一日の出来事をいろいろと話すのが楽しみでした。

私が妊娠初期に、顔面神経麻痺になつて入院したときは、毎日、お見舞いにくれてくれましたね。娘を早産で産んだときは、娘は小児科に入院。付き添っている私に、毎日、朝昼晩とお弁当をつくつて、父に持たせてくれましたね。毎朝夕に片道1時間もかけて、父が届けてくれたお弁当を食べながら、夏の青い空を見て、涙しただけを思い出します。

昔から股関節が悪く、足をひきずついていた母。「私たちが学校を卒業するまでは入院できない」と、痛み止めを飲みながら働いてくれました。娘が生まれてからは、「孫を抱きたい!」一心で、やっと手術を決心してくれた母。今では、娘と一緒に走ることもできるようになりました。

お母さん学校 父親にはわからない 子どもと母親の第六感的関係

text: 木村 乃
ビスデザイン株式会社 dk@biz-design.co.jp

子どもは、母親のお腹から生まれてきた一心同体の関係であったという事実をしっかりと記憶している。

死ぬときに思い出すのは、決まって「お母さん」。何かの事情で生まれた直後から母親と接する機会がなかった子ども、おそらく産後の母を探し求めながら死ぬだろう。第六感的関係がそこにはある。

残念ながら、父親はそういう存在ではない。父と子は、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚(?)の五感でしかつながっていない。特に、視覚と聴覚の役割が大きい。実はぼくたち父親は、本能的にそのことを知っている。子どもに説教をしたがるのはそういうわけだ。

子どもは母親の言うことを、得てして聞かないものである。一心同体だから許してもらえると第六感が囁くからだ。父親にはそれを感じない。だから「お父さんは怖い」となる。これが自然な親子関係である。つまり、ものわかりがよく、説教もせず、怖くもない父親になろうなどと思つてはいけない。地震、雷、火事、親父。聞いたことあるよね、お父さん。

オババの育児日記

ワタシ、孫がいるんです!

たっくんが編集部に来ると、仕事が全面ストップする。なので、最近では、たっくんが来る日は、仕事をやめて遊ぶことにしようと、発想の転換をした。



「ババ、ぼくも稼ぐよ!」真剣に働く2人

先日も、平日の朝からお弁当をつくり、近くの公園へ。

4歳のたっくんは、ありったけのエネルギーを出してぶつかってくる。そのパワーに、確実に老いを感じる私。

少し前まで、講演会で「ワタシ、孫がいるんです!」と話す、「ええっっ!」と反応があり、にんまりする私だった。つい調子に乗って、今の「ええっっ!」はちょっと小さかったので、もう一度言いますね。「ワタシ、孫がいるんです!」と繰り返すと、ノリのいいお客さんが、「ええっっ!」のやらせバージョンにつきあってくれる。

が、そんな時代は、何処へ。最近、すっかり「オババ」が板についたのか。何の反応もない客席。ごく自然に話を聞き流す参加者たち。その事実、密かに傷ついている私を、誰が想像するだろう。

たっくんの成長を手放して喜んでいて私だが、それは同時に、私が確実におばあちゃんになっているということでもあった! いい歳をして、そんなことにも気づかない、浅はかなオババ。

経済学的にいうと、たっくんの成長曲線とオババの退化曲線が交わるところが「限界効用」。その地点を過ぎると、たっくんの自立が始まると同時に、私は、どんなに足掻こうとも、オババの域に突入だ。

すでに前兆が現われている。先日たっくんが「お母さん業界新聞」の発送を手伝ってくれたときのこと。パパと並んで封筒に住所シールを貼っていた。「これが終われば、ちゃーちゃん(私)と遊べる!」と仕事に励むたっくん。「スゴイね。お仕事ががんばってくれたから、たっくんにバイト料払わなくちゃね!」と言った。

すかさず反応したたっくんに「えっと…300円ね」と私。すると、なんとたっくん、仕事の手を休めることなく、ましてや表情ひとつも変えることなく、クールに「2万円」と言うではないか(嘩然)。えっ! お金の価値もわかっているの!?

この日、たっくんの成長曲線は、NYの株価とは反対に、一気に急上昇したのだった。(藤本オババ)

「弟育ても、大変なんだよ」

良を支えるお母さん

元気と野菜を分け合う関係づくり ~心と体の健康のために

ふるば村自然農園 渡辺純子さん(長野県・40歳)

「たとえば、娘は赤ちゃんのときからドツシリした存在感があり、眠っている姿からも意志の強さを感じました。子どもにはそれぞれ持つて生まれた個性があり、それをそのまま伸ばしてあげられれば、今も子育てをしています。子どもたちの前では、毎日できるだけ明るい顔で接したいと心がけることで、自然と私自身、強くたくましくなれた気がします。14年前に名古屋から長野県信州新町に移住、夫の啓道さんと2人で農業を始めた渡辺純子さん。16歳(長女)と14歳(長男)のお母さんでもあります。

「これからの時代を生き抜くためには、笑顔が大切だと思つています。それには体の健康はもちろんです。心が元気でなければいけません。だからこそ、子どもたちには、自分の好き

「たとえば、娘は赤ちゃんのときからドツシリした存在感があり、眠っている姿からも意志の強さを感じました。子どもにはそれぞれ持つて生まれた個性があり、それをそのまま伸ばしてあげられれば、今も子育てをしています。子どもたちの前では、毎日できるだけ明るい顔で接したいと心がけることで、自然と私自身、強くたくましくなれた気がします。14年前に名古屋から長野県信州新町に移住、夫の啓道さんと2人で農業を始めた渡辺純子さん。16歳(長女)と14歳(長男)のお母さんでもあります。

「これからの時代を生き抜くためには、笑顔が大切だと思つています。それには体の健康はもちろんです。心が元気でなければいけません。だからこそ、子どもたちには、自分の好き



★「ふるば村自然農園」の野菜セットを3名様にプレゼント!(詳しくは8頁)。

取材協力 ● にんじん CLUB <http://www.ninjinclub.co.jp/>

● 池川クリニック 横浜市金沢区大道2-5-13 TEL045-786-1122

胎児からの心理学

池川 明の胎内記憶 www.1seaple.icc.ne.jp/akegawa



池川クリニック院長 池川 明

■帝京大学医学部大学院卒、医学博士。1989年横浜市に、産婦人科・池川クリニックを開業。「胎内記憶」の研究発表がマスコミで紹介され話題に。著書やDVD多数。

生まれたばかりの赤ちゃんにも、いろいろな訴えがあるようです。そのときの記憶を持っている人に聞くと、「おっぱいが美味しい、まずい」「抱き方が下手だ」「もっとおっぱいが欲しい」など。新生児にいろいろな訴えがあるとなれば、心理学が適応できるのではないかと考えられます。では「赤ちゃんの意識は生まれた直後から始まるの?」という問いには、私は当然、胎内から意識があると考えています。胎児・新生児から心理学を応用できると考えている人たちの研究学会が、現在わかっているだけで世界に3つあるようです。そのうちの1つ、アメリカに本拠地を置く出生前・周産期心理学協会(APPANH)が、と呼んでいます。2年に1回開かれる国際学会がありますが、4月末にサンフランシスコで開かれました。日本でセミナーを開いているジョディス女史の招きで、「国際的なお産の状況」というセッションの中で池川クリニックの取り組みを紹介することになりました。わずか10分の講演ですが、英語が苦手な私は清水の舞台から飛び降りる心境でした。

会場には世界17か国から300名の参加があり、メイン会場には参加国の国旗が掲げられており、中央近くに日章旗があつて、うれしかったです。会場には日本でも人気の「水中出産」を紹介したことで有名なミシェル・オダン氏をはじめ、「誕生を記憶することも私たち」の著者デーヴィッド・チェンバレン氏や「胎児は見ている」「胎児は知っている母親のこころ」の著者トマス・バーニー氏が普通に歩いていて、驚きました。私のセッションにはチェンバレン氏がご夫妻で参加され、当院で胎児期・新生児期にどのように接するのかを説明すると、思いのほか興味を持っていただきました。一番驚かれたのは、胎児が望んでいるのは「自分(胎児)の気持ちをわかってほしい」「自分に寄り添ってほしい」の2つだ、と説明したときでした。

2年前に参加したとき、英訳した私の本がAPPANHの会員に配布されたのですが、「胎児期からの心理学を教える学校で、テキストとして使っている」と言われたり、「著書に引用で取り上げたよ」と2人から本をいただいたり。世界に同じ方向を指す人たちがいることが実感でき、元気が出ました。今回アジアからの参加はインドだけで、ちょっと寂しい状況。日本からもたくさん参加してほしいですね。

会場にはテレビや新聞がなく、豚インフルエンザのことは全く知りませんでした。たまたま帰りの機内で、映画「感染列島」を見ていたら、帰国した日がちょうどフェーズ4で機内検疫が始まった日というおまけがきました。



チェンバレンご夫妻、ウェンディ女史と